

「自由民権」と「社会主義」のあいだ ——久松義典の社会学研究をめぐって——

“The Freedom and People’s Rights Movement” and “Socialism” - On
HISAMATSU Yoshinori’s Study of sociology

猪原 透*

1. はじめに——忘れられた思想家

明治10年代初めから30年代中頃にかけて教師・政治家・ジャーナリスト・著述家として多彩な活動を営んだ久松義典（号・狷堂）は、明治38年に自らが設立した金沢女学校の開校式典当日に倒れ、50歳で世を去った。今日において久松の存在は、彼が自由民権運動期に所属した立憲改進黨に対して特別な関心を抱く研究者か、明治の政治小説に興味をもつ研究者以外にはほぼ忘れられていると言ってよい。本稿ではそのことを承知のうえで、彼の多彩な活動を通して示される「自由民権」から「社会主義」への思想的軌跡の素描を試みたいと思う。

まず、久松の生涯における多岐にわたる活動を整理すると、次のようになるだろう。

第一は、主に立憲改進黨員として行われた政治活動である。同党が地方新聞への党員の派遣・地方遊説を通して党勢の拡張を図ったことはよく知られているが、久松は明治15年7月に入党後、郵便報知新聞、朝野新聞のほか多数の地方紙で筆を執った。また明治19年には東京府会議員となっている。明治24年の第一回総選挙に落選し政治の第一線からは退くこととなるが、翌

* 立命館大学文学部授業担当講師

年『北海道毎日新聞』の主筆として招聘され渡道すると、北海道議会設置要求の論陣を張り、全道を巡回、同運動の機運を高めた。

第二は、明治30年代前半にかけて精力的に行われた、社会学および社会主義に関する執筆活動である。片山潜とも若干の交流があったようだが、久松自ら「国家社会主義」を標榜するその著作は、その後の社会主義の流れから見てやや孤立した位置にあると言わざるを得ない。しかし、矢野龍溪の『新社会』と並び、久松の著作は民権運動から社会主義への連続性を示す代表的な著作として、明治思想史上、相応の関心を払われてしかるべきであろう。

第三は、前記ふたつの活動と並行して行われた、政治小説ないし社会小説の執筆活動である。これについては柳田泉による詳細な研究があるので¹⁾、本稿では必要最小限にのみ触れることにする。

第四は、政治活動が行われた時期をちょうど前後に挟み込むかたちで行われた、教育者としての活動である。まず明治14年に東京師範学校を中退した後、栃木師範学校教員となり、校長・県教育会長を務めている。この間、教育に関する複数の翻訳書と、「読本」教科書の執筆者としても活躍している。立憲改進黨に入党してからは一時教育社会から離れることになるが、明治31年7月に栃木県栃木町（現・栃木市大町）に移住し実業補修学校を開校すると、門下生には自ら執筆した教科書によって実業教育を施すなど熱心な運営を行った。しかし経済的に成功したとは言い難く、明治37年に金沢の政教新聞（明治40年に北陸新聞と改題）へ招聘されたのを契機として実業補修学校を閉鎖し、金沢で最後の事業として女学校の設立に取り組んだのであるが、冒頭で述べたように開校式典の当日に倒れ、翌月世を去った。

こうした多岐にわたる久松の活動を、同時代人たちはどのように評価していたのだろうか。一例として、北海道議会設置運動に関するものを見てみよう。「その当時久松が来道することに就ては嘗て徳富氏が東日入りをした程の一大センセーションを捲き起したものだ」と、そしてその期待に違わず

「実にその文章の筆力の強さと文の迫力の大なる点にかけては到底尋常人の及ぶことの出来ぬもの」を見せたのであるが、しかし彼の活動は成果を挙げることなく党派間の対立によって分解し、久松自身も「轆轤落莫に陥ち入ることとなった²⁾。このように久松の精力的な活動を賞賛しつつ、結果として大を為さず、不遇な境遇に陥ったというのが久松の近くにいた人達に共通する評価であった。実業補習学校での教育活動や社会主義に関する著述についても、教え子からの評価は別として、学校周辺での評判は「人は彼を目して時勢遅れの学者なりと言ひ、或は社会問題云々を唱へて茶を濁す小才子なりと云ふ」というようなものであったらしい³⁾。

こうした評価が同時代において一般的のものであったと見てよいとするならば、久松は多様な分野において活動を試みたが、そのいずれにおいても大を為さなかった「器用貧乏」あるいは「何でも屋」であったということにならざるを得ない。これを気質の点から見れば、政治家としては学者的に過ぎ、学者としては政治的に過ぎたということになるだろう。

かくして久松は没後、歴史的個性としては忘れられた存在となった。昭和初期の「明治史」流行のなかで何度かその活動の掘り起こしが試みられたことはあったが⁴⁾、多岐にわたる活動をその全体として捉える試みは、戦前に柳田泉が久松の政治小説を論じるための予備作業として行ったのを最後に⁵⁾、まったく行われていないと言ってよい。

だが、歴史的個性としての久松は、その死とともに忘れ去られてよいほど無価値な存在であるのだろうか。この後論じていくように、その活動の円熟期にあたる明治30年代に刊行された社会学・社会主義に関する著作は、決して洋書の機械的な翻案といったものではなく、民権運動以来の政治活動の経験や、日清戦後の時代状況に関する問題意識が強く反映されたものであった。これまでも久松の活動は、文学史、政治史、教育史といったそれぞれの専門領域の視点から断片的に取り上げられてきたが、むしろ久松個人の時間的な変化も視野に入れつつ、その全体像を明らかにすることによって初め

て、その歴史的個性も明らかになるのではないだろうか。

とはいえ、これから本稿で行われる久松の生涯の検討はむしろ、久松個人の再評価だけを目的とするわけではない。

本稿では久松を通して、明治 20 ～ 30 年代という日本の社会学史および社会主義史において重要な、しかし今もって研究が手薄な時期の歴史的な考察を試みたい。すなわち、明治 10 年代において事実上「スペンサー社会学」として出現した社会学がその内容を多様化させていくとともに、アカデミズムのなかで制度化され、社会主義との区別を徐々に明確化させていく過程を、久松という社会学者かつ社会主義者（久松はこうした立場を「社会家」と呼んだ）の生涯を通して再考することが、本稿の第二の目的である。従来の研究はこうした過程について、スペンサー社会学から一足飛びに明治社会主義および講壇社会学への移行として捉え、日清・日露の戦間期における動向は十分に検討されてこなかった⁶⁾。本稿ではこうした研究史上の欠落を意識しつつ、久松の青年期における思想形成、民権家としての政治活動と関連づけながら、日清・日露の戦間期における久松の著作を検討する。

なお、社会学史のみならず政治思想史の視点から見ても、久松の著作は検討に値するものである。大日方純夫がその立憲改進黨研究のなかで指摘しているように、同党からは日清・日露戦後の社会問題論の担い手が数多く輩出されている⁷⁾。しかしその連続性に関する具体的な検討は、田中正造を除けばごく僅かであり、『新社会』によって社会主義者として広く認知されていた矢野龍溪においてすら同様の状況にある。こうした研究状況を踏まえると、久松の思想の分析は、自由民権運動期と日清・日露戦間期をつなぐ知的連続性を捉えるための基本的な視座を構築する一助になると考えられる。これが本稿の第三の目的である。

2. 「教育」と「英学」による経済的自立の試み——久松義典の精神形成

久松義典の生涯はほぼペリー来航から日露戦争までの50年間にあたり、『東京経済雑誌』を主催した田口卯吉とほぼ同じ期間を生きていたことになる。その生涯を彼個人の転機に沿って区切るとすれば、以下の四期に区分するのが妥当であろう。

第一期：安政2年の誕生から、明治15年に栃木師範学校を辞職するまでの青年時代。

第二期：立憲改進黨に参加し、各地の新聞社の編集事務、東京府会議員を務め、第一回総選挙に出馬し落選するまでの政党政治家時代。

第三期：明治25年に『北海道毎日新聞』の主筆として渡道し、北海道議会開設運動に取り組みながら、札幌農学校の新渡戸稲造を通して欧米の社会学を学び直したジャーナリスト時代。

第四期：病氣療養のため明治31年に栃木県栃木町に移住し、私塾を営みながら「社会家」を自称し、社会学・社会主義に関する著作を残した時代。

本稿の目的からすれば第四期が特に重要であるが、その思想を彼の生涯の全体像のなかで捉えるため、煩を恐れずに第一期から順に論じていくことにしたい。

久松義典は安政2年10月、桑名藩（久松松平家）の江戸藩邸に生まれた⁸⁾。幼名は芳次郎。久松家はその名が示す通り桑名藩中でも屈指の名家であり、代々家老を勤める家柄であったという。父・義制も五百石の家督を相続したあと、程なく二百石の加増を受け、家老に加わり、更に百石の加増を受けた。ところがその後、義制は「御咎蟄居」の処分を受け、藩政の表舞台からは姿を消すこととなる⁹⁾。おそらくこうした事情も関係して、義典は生後まもなく家督を相続し¹⁰⁾、傾きかけた家を支えていく責任を負うこととなった。もっとも、父・義制が早く失脚したことは、義典を幕末維新期の政治的動乱から隔離し学問に専念することを可能としたとも言え、義典は桑名にある藩

校・立教館で経書・史書を学び、明治4年3月には立教館の句読師に就任している。

このように表面上は順調であった彼の歩みは、明治4年8月の廃藩置県によって大きな転換を遂げることとなる。立教館は明治5年1月に閉校となり、同年4月には桑名藩の知藩事であった松平定教の侍読として上京するが、まもなく定教のアメリカ留学に関する話が持ち上がったため侍読の職を解かれた。かくして久松は自ら糊口の道を模索し、自立していく必要に迫られたのである。

明治6年から明治8年までの久松義典の足跡については、主に東京と大阪で公立学校の漢籍教師として収入を得、その一方で複数の私塾を転々としながら英学を学んでいたという程度にしか分かっていない。このとき久松が教師という、後々まで携わることになる仕事を選んだ背景には、まず藩校教師としての経験があるのだろう。しかし同時に、旧藩屈指の名家の出身であり、かつ桑名藩という官吏となるのは困難な出身であることによる消極的選択の結果だったのではないと思われる。官吏や警察・軍人を除けば、ふさわしい仕事は教師以外には存在しなかった。

明治8年12月から9年7月にかけて父・母・両妹を立て続けに亡くしたことは、教育の道へと本格的に進む契機となったと思われる。同年、久松は残った弟を親類に託すと、設立まもない東京師範学校に入学し¹¹⁾、12年9月に中途退学するまでのあいだ、教育に関する知識と英学を学んだ。同年11月には栃木師範学校に二等教諭として赴任し、14年12月には校長心得・県教育会長、15年4月に県御用掛へ移動となったのを機に辞職するまでのあいだ師範学校の機関誌『教育叢談』の編集長としても活動するなど、栃木県の教員養成に少なからぬ功績を残した¹²⁾。東京師範学校在学時から栃木師範学校の教員時代にかけて教育に関する著述・翻訳にも熱心に取り組んでおり、明治12年には『体育新書』『泰西雄弁大家集』、13年には『新撰小学読本』『万国史略』、14年『学校総理論』『啓蒙修身学』といった著訳書を残している。

栃木師範学校を辞職した久松は、立憲改進黨に参加し、政治家としての道を歩んでいくことになる。この時期については節を改めて検討するとして、ここで久松の精神形成について改めて考察しておきたい。第一に取り上げるのは、久松家という桑名藩屈指の名家の出身であることについてである。明治維新に際しては敗者としての屈辱を味わうこととなり、後年にも久松は「藩閥は日本社会の寄生虫に過ぎず」と述べ、藩閥政府に対する敵対心を抱き続けた¹³⁾。もっとも、久松が自らを「士族」として位置付けたうえで藩閥政府を批判していたというわけではなく、後年の著作を見る限り、そうした意識はむしろ乏しいように思われる。名家の出身とはいえ、久松の場合は父・義制が早くに失脚したうえに、学問によって桑名藩内での立身を図った彼自身も、廃藩置県や旧知藩事の留学といった事情によって旧藩から切り離され、その後は旧藩から学資の支援を受けることもなかった。必ずしも自らの意に沿う形ではなかったとはいえ、こうした事情は既成の観念や士族意識からの離脱を容易にしたであろう。

第二に取り上げるのは、明治維新後の社会変動のなかで困窮を余儀なくされた点についてである。父母弟妹合わせて五人の生活は彼の双肩にかかっていた。明治8年の秩禄処分を契機に久松は家族を伴って上京し、公立学校の教師としての収入で家族を養おうとするのだが、まもなく父・母・両妹を立て続けに亡くしている。このとき久松は経済的自立の重要性を、身をもって体験したということができるだろう。ただし地主のような不労所得者や倫理観の欠如した実業家のあり方に対して久松は批判的であり、いかにして独立自営の精神と社会倫理を身に着けた実業家を日本に生み出し、彼らを政治の担い手として育てていくかということが重要な関心事となっていく。国会開設を間近に控えた明治22年、久松は横浜で行った演説のなかで、国会議員に求められる資質を「精神気力が慥かで大胆」で「政治上の事経済上の事に就て実際の働き実際の智識のある人」と整理したうえで、国会とは「煎じ詰めて見ると商人の取引所のやうなもので〔中略〕金銭の出納を離れた政治は

ありません」と述べているが¹⁴⁾、政治を日常的な経済活動の次元から位置付けようとする志向は、自身の生活体験に根差したものであった。

第三に取り上げるのは、廃藩置県以後、久松が「教育」を自らの仕事としたことについてである。ただしここで注意すべき点は、久松が教師を志した明治10年代前半においては、「教師」という仕事は発展途上にあり、当事者にとってもそれがどのような仕事であるのかは明確ではなかったということである¹⁵⁾。東京師範学校を中途退学した久松が栃木師範学校に就職したこと自体、制度としての「教師」が未確立であったことを示している。栃木師範学校教員としての久松は「性素ト学理ヲ談シテ人ヲ教ユルコトヲ屑シトセス弁舌討論ノ大ニ将来ノ世用ヲ為スヘキコトヲ信シタルヲ以テ或ハ校内生徒ノ為メニ講談及ヒ討論会ヲ起シ」と伝えられており¹⁶⁾、教育の力点は生徒の自主的な演説・討論に置かれていた。また、久松は明治14年4月に曾田愛三郎と「協同義会」という民権結社を組織しており、設立趣意書のなかで民権国会論者を「世上輕躁なる」と表現し、民権・国権を論じるよりも先に「普通切近の智識及び義務を明にし殖産興利の道を求」めるべきであると述べていることも注目し得る¹⁷⁾。ひとにぎりの士族を担い手とする悲憤慷慨型の民権運動への違和感と、政治社会の充実のためにはまずそれに先行する生活世界に向けた新しい思想の啓蒙が必要であるという問題意識が久松にはあったと見てよいだろう。彼が栃木師範学校の辞職後に立憲改進黨に身を投じるのは、上記の問題意識から見れば必然であった。

第四に取り上げるのは、教育と英学の関わりである。久松にとって教育は、経済的自立のための不可欠の手段であったが、それと同時に英学を真剣に学ぶ契機にもなったと思われる。久松が文部省体育伝習所の教師ジョージ・リーランドの講義を筆記・刊行した『体育新書』の序文に、もともと病弱であった自分がリーランドの教える西洋式の体操に取り組むことで「体力頻ニ増シ〔中略〕彼ノ宿痼ノ如キハ稍ク自ラ退イテ精神氣力更ニ一層ノ爽快旺盛ヲ加エ」たと記しているのは¹⁸⁾、そうした事情をよく伝えていると言えるだ

ろう。同書のなかで久松は、西洋式の体操を導入しなくても日本古来の武芸によって体を鍛えればよいではないか、という批判に対し、体操は「心情ヲ悦ハシメ〔中略〕生理ノ本旨ニ適」う点で武芸に勝ると答えている¹⁹⁾。久松は師範学校での教育において、いわば身体を通して英学の威力を実感したのである。ただし久松は、その後も一貫して英学を志しながら、一度も海外に渡航する経験を持たなかった。この事実は久松の西洋理解にある種の枠をはめたと考えられる。

総じて久松義典は、独立自営の精神、民権運動における士族的要素への反発、悲憤慷慨型に代わる西洋合理主義的な政治家像といった後の平民主義につながる考えを、観念的ではなく、自らの生活体験を通して獲得していったと言える。立憲改進黨の政治家として久松は徳富蘇峰と親交を深めていくことになるが、三国干渉を経て蘇峰が「力の福音」に目覚めた後も、久松は道徳すら西洋から学ぶべきであるという立場を堅持していくことになる。そしてそれを支えたのが、上記の生活体験であった。

3. 自由民権運動と平民主義——思想的自立への模索

久松の生涯の第二期にあたる政党政治家時代の活動の中心は、北陸、九州など各地への遊説と新聞編集に置かれていた。明治15年7月に久松は改進黨へ入党すると同時に報知新聞社の社員となり、それを皮切りに明治22年までの間に大阪新報・朝野新聞・富山新聞・海西日報の編集事務に携わるのと同時に、地方遊説を精力的に行っている。その間にも明治19年10月には東京府会議員に当選し、政界に足場を築いた。

このように一方では本務として政治活動、そして政治活動と一体となった新聞記者としての活動に従事しながら、久松は他方で将来の議会政治を主題とした『代議政談 月雪花』（2冊）、冒険小説の体裁を借りて日本の南洋進出を説く『南溟偉蹟』、南海泡沫事件を題材に投機の過熱を戒める『商海狂

乱』という三種の政治小説をそれぞれ明治20年に刊行している。政治小説の内容についてここでは触れないが、久松自身は『代議政談 月雪花』の例言のなかで「読書ノ要ハ知見ヲ開クト同時ニ快樂ヲ享クルニ在リ」と述べ²⁰⁾、政治思想を「快樂」とともに民衆へと啓蒙する手段として政治小説を重視していたことは、当時の民権家の文学観を考えるうえで重要である。その後、久松は尾崎行雄、吉田喜六、町田忠治とともに「文学会」を結成し、その会則に「全国を校舎となし人民を生徒となし以て互に智識文章詩歌其他の学芸を研磨する」ことを掲げている²¹⁾。

こうした多方面での活躍や交友関係から見ると、柳田泉が久松を「矢野龍溪、藤田鳴鶴と比肩するところまではいかぬにしても、当時、尾崎学堂、犬養木堂の連中とは十分伯仲の間に立ち交わることの出来るだけの声望と財力をもっていた」と評したのも過分の言とはいえないだろう²²⁾。かくして満を持して第一回総選挙に三重三区から出馬するのであるが、大方の予想に反して落選する。この間の事情について柳田は「落選した原因は彼の競争相手たる某ブルジョア候補が、言論戦ではとても敵し難いを見て、秘密に黄金戦を用いたためであったという」と述べている²³⁾。当選者である天春文衛が実際にそのような方法を取ったのかどうかを今ここで確認することはできない。ただ、久松は選挙の直前に大隈重信に宛てた書簡のなかで、同じ三重三区から出馬した立憲改進黨系の候補者である木村誓太郎について、木村の支援者である実業家が主だった選挙人を自宅に招き酒肴を供し種々の密約を結んでいる、至急卑劣な手段を取らないよう木村に命じ、かつ貴族院への推薦が得策であると御勧告いただきたい、と述べていることが注目される²⁴⁾。先述したように久松は経済観念に優れた実業家を新しい政治の担い手として期待していたのであるが、そうした経済と政治の結合がもたらす負の側面を、同じ立憲改進黨員との競争によって実感させられたことになる。この落選は久松の政治活動において決定的な転換点となった。

とはいえ、久松は落選後しばらくのあいだ中央政界周辺での活動を継続し

ている。小林伝平と明治23年12月に結成した公民協会がそれである²⁵⁾。活動としては、会員である古田新六による『帝国議会便覧』の刊行（明治23年12月。久松も序文を寄せている）、末広鉄腸、吉田喜六、田中正造、鳩山和夫、中江兆民、そして久松とった人々を話者とする演説会の開催が記録されているほか²⁶⁾、速記術の講義や政務調査のための資料提供も行う予定であったらしい²⁷⁾。落選後も久松は、成立した議会を円滑に運営するための環境づくりに取り組もうとしていた。しかし、この公民協会の活動も共同設立者である小林伝平がまもなく離脱することによって休止へと追い込まれ²⁸⁾、久松は『北海道毎日新聞』を経営する阿部宇之八の招聘に応じて渡道することになったのである²⁹⁾。

こうした「政治的啓蒙」という色彩の濃い第二期の政治活動と密接不可分のものとして、久松の政治思想の展開にも注目しなければならない。その際、特に重要な点は徳富蘇峰との出会いであろう。前述したように久松はその生活体験を通して独立自営の精神の重視、民権運動における士族的要素への反発、悲憤慷慨型に代わる西洋合理主義的な政治家像といった平民主義に通じる考えを獲得していったのであるが、それが明確な形をとっていくうえで、蘇峰との出会いは決定的とも言うべき意味をもつ事件となった。

久松と蘇峰が最初に対面したのは、明治18年8月のことである。この時期、『郵便報知新聞』は「惨状観察員報告」と題して、松方デフレの不況に苦しむ各地の農村に記者を派遣、彼らの目を通した農村の惨状を報じており、九州各県を担当したのが久松であった。全7回にわたって連載された報告のうち第4回に蘇峰と大江義塾に関する話題が現れるが、それは「惨状観察員報告」というテーマからすればやや浮いた印象を与える箇所となっている。

又一日同地の大江義塾に詣りて徳富一敬翁、同猪一郎氏に面晤せり。該私塾は洋漢学を授教する所にして、〔中略〕猪一郎氏は年僅に弱冠を越へて漢洋学に達しく、其近著、自由道德及儒教主義、明治廿三年後の政

治家の資格と標題せる両者の如きは世上に公発せしものに非すと雖も、其識見及び文辞の非凡なるは余の深く敬服せし所なり。故に其の教授の方法も学者と壮士とを兼備せる人材を養はんとし、右にミルトンの筆を握りて左にハンプデンの剣を執るとの趣意なれば、学生の皆勇壮活発なるは殊に賞すべし。予因て所見を演説して大いに諸氏に望みたり。³⁰⁾

このとき久松は30歳、蘇峰は22歳。蘇峰が前年に印刷し有志に配布した『明治廿三年後ノ政治家ノ資格ヲ論ス』『自由、道德、及儒教主義』にも久松は既に目を通しており、旧来の士族的な民権運動への批判と「旧日本」から「新日本」への転換、つまり世代交代の主張を含んだ蘇峰の著作に久松は強く共感したと考えられる。二人の交流は蘇峰が上京し『国民之友』を創刊してから頻繁なものとなっており、久松は蘇峰に矢野龍溪ら立憲改進黨員を紹介し³¹⁾、また新聞編集事務の人材斡旋を依頼³²⁾。その一方で蘇峰は『国民之友』に久松の論説や著作の紹介を掲載している³³⁾。

このような蘇峰との交流からも推察されるように、この時期の久松の思想はおおよそ平民主義の枠内にあったと見てよいだろう。例えば『国民之友』に掲載された論説では、「一国の政治と云へは何でも蚊でも主治者に向ひて之を論議し之を詰責し終には勸告説諭譏謗罵言」するものだと考えている民権運動家を批判し、国会の「組織の原素と為るものは他国人に非すして本邦の人民なり之か原素を選択するものも亦本邦の人民なり」と述べている³⁴⁾。では、その人民にはいかなる資質が求められているのか。久松は「何をか社会の顕象と謂ふか」と題した論説のなかで、次のような議論を展開している。「心神の顕象先つ起りて事物の顕象之に随ふの理」が存在し、「善く之を察するものを識者と云ひ之を察せざるものを俗夫と云ふ」³⁵⁾。心神の現象（顕象）が原因で、事物の現象が結果として生じるという因果関係を理解していないことから、世態の変化といった事物の現象に一喜一憂することになり、「羨慕、嫉妬、憎悪、仇敵等の陋態」を見せることになる³⁶⁾。そのため社会の改革を志すものは、社会に流れる因果関係を把握した「社会観察者たるの

地位」に立たねばならない³⁷⁾。このように久松は、社会を観察する視線のあり方という問題を媒介として、原因への働きかけによる社会の漸進的な改革を唱えるとともに、社会改革の担い手はいかなる存在であるべきかという一種の人材論を展開したのであった。これは蘇峰が『新日本之青年』で挙げた青年の課題を連想させる議論であるとともに、社会の見方としては原因と結果の連関として見るからこそが「科学的」な態度だという確信に溢れているという点で、フェロノサが「社会学的視点」と呼んだ発想とも共通している³⁸⁾。この「心神の顕象」から「事物の顕象」という因果関係を重視する立場は、のちに社会主義者として活躍する際にも引き継がれていく。

さて、こうした立場から久松は西洋科学の導入に基づく新しい人間像の形成を説き、それが政治世界の新しい基盤となることを求めたのであった。しかし、その人間像は「羨慕、嫉妬、憎悪、仇敵等の陋態」と対置されていることからわかるように、多分に道学的な色彩を帯びており、そのため「心神の顕象」すなわち精神の変革によって問題が解決されるという見方に終始するか、さもなくば政治活動における心構えないし政治組織の運営技術を注入すれば望ましい政治が実現され得るという議論に流れがちであったことは否定できない³⁹⁾。

なお、蘇峰は『将来之日本』のなかで「欧州諸国ノ形成ハ腕力主義ノ頂上ニ達シタル者ト謂ハサル可ラズ」と指摘し⁴⁰⁾、その実例としてビスマルクによる国家社会主義政策を厳しく批判している。蘇峰はこのビスマルク批判を基本的にスペンサー『社会学原理』に依拠する形で行っており、「軍事型社会から産業型社会へ」という社会進化の原則に逆行する軍事型の社会統制を、ビスマルクの国家社会主義に見ていた。こうしたビスマルクの「腕力主義」に対する否定的評価は、久松にも共有されていたと見てよいだろう。ビスマルクのもとドイツの議会、内閣のいずれもが無気力になっているという内容の評論「伯林社会」を、久松は『国民之友』で「目下本邦にも万事総て独逸風の大流行に当りては斯る手簡を一読し置く事決して無益に非ず」と紹

介し⁴¹⁾、同誌上で全六回の翻訳を掲載している。

ともあれ、その実現のために奮闘してきた国会に居場所を得ることができなかった久松は、活動の場を北海道へと移している。こうして第三期の活動が始まるのであるが、従来の活動の延長線上にある北海道議会開設運動に加えて⁴²⁾、北海道に関する百科全書的な著作である『北海道新策』（明治25年）、『北海道通覧』（明治26年）を刊行し、社会的には北海道・南洋への殖民の奨励、札幌の産業振興を目的とする北海道共進会の組織化などを行っている⁴³⁾。さらに歴史研究にも着手し、田口卯吉の『史海』に「欧州教育小史」⁴⁴⁾、高田屋嘉兵衛の伝記や徳川幕府の蝦夷地経営に関する考察をやはり田口の『東京経済雑誌』に長く連載するなど⁴⁵⁾、きわめて多方面にわたる活動を見せることになった。

総じて第三期の久松は、北海道議会の開設請願のとりまとめに取り組む一方で、日本全体で考えれば「政治思想の何物たるを説くの必要を感じざるのみかは、之より起るべき各種の弊害を防止するべきの時期に達し」たという認識から⁴⁶⁾、現在の明治国家の外延に新たな活動領域を築こうとしていたと言えるだろう。つまり、明治国家の制度化が進められるとともにある種の閉塞感が強まっていったこの時期において、久松は自らの役割を明治国家の制度的補完（北海道議会の開設）と空間的・時間的拡張（殖民による海外進出・海事事業と歴史研究）に求めたのである。このうち空間的拡張については必ずしも対外硬であったというわけではなく、三国干渉の直後に「現時国民的憤慨の情焰は、一括して之を海外事業の伸張に転用せよ、鬱勃たる千萬無量の不平は、サラリと之を西海の波に流し去り」と述べているように⁴⁷⁾、臥薪嘗胆という国家的風潮への批判的視点を含むものであった。また、北海道への国内殖民についていえば、久松が当時においては和人によるアイヌ迫害への最も厳しい批判者のひとりであったことは疑い得ないように思われる⁴⁸⁾。

しかし、結果として久松の北海道での生活は3年にも満たない期間で終えることとなった。全道を巡回し北海道議会開設請願を取りまとめた久松は、

両議院に提出するため明治26年冬に上京するのだが、そのまま『北海道毎日新聞』東京支局の責任者となり⁴⁹⁾、北海道に戻ることはなかった。詳しい理由は不明であるが、北海道議会開設請願のとりまとめや北海道共進会開催の過程で生じた人間関係のこじれが原因であったらしい⁵⁰⁾。その結果久松は北海道での諸活動について業績面では必ずしも成功を収めないまま東京に活動の場を移すこととなった。新聞記事を通して確認される限りでは、地学協会において遠洋漁業事業を議論し⁵¹⁾、内外海事学会において帝国海事博覧会開催を計画するなど⁵²⁾、公的団体のなかでの活動を試みている。

だが、『北毎』という制度的後ろ盾を失い、大学卒でもなく留学経験もない久松が言論によって公的組織のなかで自らの立場を確保することは、明治国家の制度化が進展するに従って徐々に困難なものとなっていった。そこで久松は病氣療養を契機として、かつて師範学校教員を務めた栃木県栃木町に移住し、実業補修学校を開校する。そこで久松が社会的孤立のうちに見出し、自らの著述・教育・政治活動を支えていく精神として内面化に努めたのが、「社会家」としての在り方であった。かくて第四期の活動が開始されるのであるが、その前に第三期における久松と新渡戸稲造の交際について一言しておきたい。

これまでの研究では、久松が「社会家」への転身を遂げた背景として、第三期における中江兆民との交流が指摘されてきた⁵³⁾。事実、久松とほぼ同時期に兆民もまた小樽の『北門新報』主筆を務めており、両者の交流に浅からぬものがあったことは久松自身も回想のなかで述べている通りであるのだが⁵⁴⁾、その影響関係を具体的に指摘することは難しいように思われる。その一方、久松は明治33年の論説のなかで「僕七八年前札幌羈寓の日、新渡戸学士と交友し、各種の新刊英書を借覧して、夏天の榻上げ雪夜の爐に、一段の清福を添へたりしが、就中五六の社会的新著を一読して得る所浅々ならず」と述べており⁵⁵⁾、「社会家」となる知的背景としては、こちらをより重視すべきであろう。

新渡戸は明治24年にドイツから帰国し、明治30年に辞職・渡米するまでのあいだ札幌農学校で教鞭をとっていた。その講義科目は語学のほか農学関係諸科目・殖民学・経済学・倫理など多岐にわたっており、久松が新渡戸のどのような点に魅力を感じたのか断定することはできないのだが、さしあたり以下の点について指摘しておきたい。

第一に、新渡戸が東京大学文学部で「スペンサーの番人」と呼ばれた外山正一の教えを受けた人物であることについて。札幌農学校の辞職後に書かれた『農業本論』（明治33年）が現在では農村社会学の先駆的業績として挙げられていることも念頭において考えると⁵⁶⁾、新渡戸から借覧したという「社会的新著」が久松の後の著作でたびたび引用されることになるスペンサーやL. ウォード、B. キッドなど欧米の社会学者の著作を指すことはまず間違いない。

第二に、新渡戸の殖民学について。この時期の新渡戸の殖民学については資料がほとんど残っていないが、明治26年ごろに雑誌の求めで執筆した「殖民事業の学術的研究に就て」では、J.S. ミル『経済学原理』を理論的支柱として政府の干渉を正当化する保護主義的殖民論を展開していたという⁵⁷⁾。ミルを根拠とした自由放任（古典派経済学）と保護主義（歴史学派）の折衷という発想は、久松の「社会主義」にもほぼそのまま見られる。北海道への「殖民」という問題を媒介として久松が新渡戸の殖民学を学び、殖民学を通してミルの重要性を発見したのではないか。紙幅の関係上、久松のミル理解についてこれ以上触れることはできないが、ひとつの仮説として提示しておきたい。

中江兆民、武市安哉、坂本直寛らの名前を挙げるまでもなく、民権運動の挫折から「殖民地」北海道に移住するというのは、当時必ずしも珍しいことではなかった。しかし北海道での経験が彼らに何をもたらしただのかについては、史料の不足から十分には明らかにされていない。久松の場合は比較的それが明確に示されている方であると言えるだろう。

4. 社会学による日清戦後社会の改良計画——車の両輪としての「実業的政党」と「社会家」

明治31年7月、栃木県栃木町に「下野実業学校」（名教書院とも）を開いた久松は⁵⁸⁾、明治37年に学校を閉鎖するまでの間、明治国家への建設的批判者として自らを定位し、精力的な著述・政治活動を展開していった。常時20人ほど集まっていたという門下生からは、栃木婦人協会を創設し慈善事業の組織化を進めた平岩幸吉や⁵⁹⁾、のちに大連でジャーナリスト・社会事業家として活躍した柴田博陽を輩出し、また『東京経済雑誌』を中心に社会主義に関する論説を多数発表するなど、第四期において久松はもっとも多産な時期を迎えている。

とはいえ、その生活は概して苦しく、久松および門下生たちは警察から「危険思想」の持主として監視されていたという⁶⁰⁾。加えて、かつては立憲改進黨で同格の存在であった尾崎・犬養らが政界で重きを増していくのに対し、『北毎』を離れた久松がひとり私塾の経営者・在野の学者となったことは、周囲に落魄という印象を与えるのに十分であった。また、明治国家の諸制度が整備され、学問も大学を中心とする制度化が進められたことで、久松のような公的な肩書を持たない人物が活動する余地は徐々に限定されていくこととなった。それを自覚しながら著述・政治活動を続けていくためには、自らが拠って立つ立場を繰り返し確認し、表明していかなければならない。その立場こそが「社会（改革）家」に他ならなかった。久松は自らを意識しつつ「順境と逆境は本来精神的にして物質的にあらず、然るに世人は一たび誤りて単にこれを朝野の地位より判定せしが為め〔中略〕彼らはその所謂逆境の士を以て概ね不平の徒失意の人とせり」と述べ⁶¹⁾、続けて「近代社会的改革家の言論及び事業は、吾人は少しく論評を試みんとする題案なり、こは欧州の真の社会改革家のなるものが、本来不平党にあらず、失意人にあらず、自己の境遇によつて憤悶を洩らすが如き小丈夫にあらずしことを説明し、併

せて彼等が理想の極めて高明遠大、その言論の極めて公正穩健、而かもその事業の極めて着実周到なりしことを開示せんが為めなり」と語っている⁶²⁾。

この「社会家」としての立場を支えたのが、第三期において既に触れていたと思われる、同時代の欧米の社会学に関する知識であった。1890年代には自由放任主義とスペンサー社会学の結びつきに対する批判が宗教、学問、社会運動など多方面から行われ、社会学では米国のL. ウォード、英国のB. キッドらが旺盛なスペンサー批判を展開し、シカゴ学派の第一世代にあたるA.W. スモールらも人間社会の意識的改革のための学問として社会学を構想していた。内村鑑三がキッドから、片山潜がスモールから強い知的影響を受けたことについては、つとに指摘されているとおりである⁶³⁾。こうした自由放任主義への批判を特徴とする同時代の社会学の動向は、以下に見るように久松の社会学観を大きく規定することになったと思われる。

久松は、おそらくスモールとG.E. ヴィンセントの共著に倣って⁶⁴⁾、社会学の任務を「紀述的」「統計的」「動態的」の3種に分類している⁶⁵⁾。すなわち社会学は、社会の現実の姿を記述し、調査に基づいて社会の理想を明らかにし、その理想状態へと移行する手段を提供するという、社会に関する体系的学問としての役割を果たすというのである。言い換えるなら、社会主義をはじめとする諸実践が目指すべき目的は、あくまで科学としての社会学によって提供されるのであり、宗教や伝統などによって予め与えられるようなものではない、ということになるだろう。こうした立場から久松は、他の社会主義者が往々にして社会に関する正確な知識を欠き、義憤・熱情によって突き動かされることを批判する一方で、以下のように「産業主義の世の中」にふさわしい社会的理想の創出を説くのであった。

人間の道徳は時勢の変遷によって根本から改革せねばなるまい、楠正成の精忠や高山彦九郎の奇行や又は日清戦争に功名したる将校兵士等の忠勇談などは今日唯歴史上の材料となる計りで二十世紀の少壮人士にはお手本とすべき事ではあるまい〔中略〕現時は産業主義の世の中だか

ら近世産業界の一偉人に就て詳細に説きたい。⁶⁶⁾

吾人の精力は物質的方面にのみ限るべきにあらず、今後の事は道義的に在り、精神的に存す、社会的大法を講究してこれを運用すること猶かの機械力の如く動力の如くならざる可らず。⁶⁷⁾

社会学の体系的説明を目指して執筆したと思われる『社会学問答』が、全体の分量の約3分の1を欧米実業家の紹介によって占められているというのは示唆的である。現在が産業型社会であるという見立ての元、欧米の実業家がいかなる「道義」に従って活動しているかを豊富な実例によって「統計的」に示し、社会主義を始めとする諸実践に指針を与えること。これが久松にとっての社会学の役割であった。久松の社会学は、突き詰めて言えば「心神の顕象」から「事物の顕象」が生じるという単純素朴な因果論であったが、その因果論に基づいて動員された事例の総量が豊かで、バラエティーに富んでいるのが特色であった。

こうした社会学の視点から見たとき、久松は日清戦後経営の最中にあった当時の日本社会に対していかなる状況把握をもっていたのだろうか。第一に指摘されるのは、国政における産業政策の軽視と、東京市政の汚職に象徴される現時の政党政治に対する否定的評価である。まず国政に関しては、「戦後経営が軍備拡張、殊に師団増加の一途となりて、軍国主義若くは尚武気風など云へるから威張りの輩のみ跋扈し来りて、産業政策の将来は、僅に民間少数識者の筆舌に上るのみ」と手厳しい⁶⁸⁾。海軍の拡張については否定しておらず軍拡全般に否定的であったというわけではないのだろうが、戦勝によって軍拡に多くの予算が回されることを警戒し、産業の振興や社会政策により多くの予算を注ぐべきであると考えていたことは間違いないだろう。しかし問題は産業政策の軽視だけではなく、星亨派の汚職に象徴される東京市政の腐敗に対しても久松は強い危惧を抱いていた。そこでこの二つの問題に対し、社会学に基づく改良案として久松が提示するのが、政界の新勢力として「実業的政党」を生み出すというプランである。

社会の風紀を振肅するは、一国元氣の作用なれとも、物質的文明の世に於て元氣の要素は、慷慨悲歌の志士のみに存せずして、社会的腐敗に隔離せる地方の中等実業家、処世能く個人的独立を保ちて、純血健全の思想ある勤労社会に潜伏することに注目すべし⁶⁹⁾

日清戦争の前年に徳富蘇峰が「有司専制去りて、富豪専制来り、富豪専制去りて、平民の天国初めて来たる」と述べているように⁷⁰⁾、政治勢力としての富豪・実業家層の台頭を民権発達の一階梯として重視する発想自体は、必ずしも久松の独創的な見解とは言えない。また、日清戦争後の「地方の中等実業家」が果して「社会的腐敗に隔離せる」存在であったかについても、大いに議論の余地があるだろう。この実業的政党の組織化というプランについては後程改めて触れるとして、ここでは政治社会の再組織化の中心に実業家たちが据えられていることを述べるに留めたい。

第二に指摘されるのは、「機械」によって生産性は向上しているが、その成果の分配は資本家の側に著しく偏り、労働者はいわば泣き寝入りを強いられているという観察である。また労働者は分業の進展により生産物から疎外され、機械の一部のように扱われていると久松は述べている⁷¹⁾。こうした問題に対し久松は、地価の値上がりといった「僥倖的貨殖」に対する課税の強化、「遺産税」の新設、そして富豪が拠出する義捐金、これらを原資として労働者への社会教育を行うべきであると主張する⁷²⁾。

周知のように「生産」よりもむしろ「分配」を焦点とするのは初期社会主義の一般的傾向と言ってもよく、この点について久松の独創性を見出すことはできない。また、分業による労働疎外という論点については、労働者の側に立って労働疎外の克服について論じることが、また資本の側に立ってより合理性を重んじる議論を展開することも可能であったはずだが、久松はそのいずれにも徹しきれていないように思われる。そもそも独立自営の精神を重んじる久松にとって、社会秩序の主要な担い手となるべき存在は農業、商業、工業をはじめとする経済的に自立した産業家たちであり、栃木町において実

業補修学校を開いたのも、そうした人々への期待から来ていた。他方、「自由競争の風潮と、資本集中の傾向は、到底避く可らざること」であると久松は考えており⁷³⁾、そうした傾向は農商工の階層分解、大資本への隷属を促すことになりそうであるが、この問題に関する突っ込んだ議論はしていない。

第三に指摘されるのは、日清戦後社会の「外資導入」に対する強い関心である。明治32年には居留地の撤廃に伴い外国人の経済活動に対する制限が大幅に緩和されたが、これによる外国資本の流入を危惧する声は大きかった⁷⁴⁾。例えば当時、日本屈指の煙草製造販売業者であった村井兄弟商会は1900年にアメリカン煙草会社と提携し、紙巻煙草「ヒーロー」「サンライズ」などを販売して、純国内資本と激しく対立していた。この村井兄弟商会に対しては、久松によると「外資輸入にあらず、外人に略奪せられたるもの、営利の目的、外人の専有、反旗を翻へして外敵に通じたるもの」という誹謗中傷が投げかけられたという⁷⁵⁾。こうした外資への反発を久松は日本社会の「保守主義」の象徴として見ると同時に、「いよいよ外資輸入を実施せんとする場合に際し、社会行政の主義計りは、旧套を墨株して可なるもの乎」と見ていた⁷⁶⁾。

こうして見ると、総じて久松は日清戦後の日本社会に対し、産業化の進展を肯定しつつも「産業主義の世の中」にふさわしい社会的理想（道義）が不在であるため、軍事型社会への揺り戻しや金権政治、労使間の格差拡大、内向きの保守主義といった種々の矛盾が生じていると考えていたように思われる。こうした時代像を踏まえつつ、再び「社会家」としての久松について考察を試みよう。

「心神の顕象」がまずあり、それに従って「事物の顕象」が生じるという因果関係を政党政治家時代の久松が重視していたことは前節で見た通りであるが、物事の精神的・道徳的側面と実際の活動の因果関係という構図は、この時期の政治体制に関する議論においても重要性をもつ。「政界の暗黒政客の惰眠、政党の無能有害は、今後のいづれの日に回復すべきを知らずとし

て、瞑目沈思すれば、結局、望を社会家に属して、中産階級の激動より、革新の端緒を開くより外なしと謂はんとす」と久松は述べ⁷⁷⁾、社会家による中産階級（実業家層）への働きかけ（すなわち自身の政治的・社会的役割の自覚を促すこと）が新たな政治体制の構築のために求められるのであるが、その働きかけの手段として、まずは教育が重視されることになる。このとき、久松が教育を「生産事業」のひとつとして位置付けていることに注目したい。

農業、工業、漁猟、採鉱より、商売、貿易、運輸等は、皆重要な生産事業にして〔中略〕また、財貨は独り有形物に限らず、人の学識、才能、健康、皆この中に属するが故に、生産に於ても亦無形のものあり。かの学校及び協会に於て、人の知識を開き、徳性を養へ、または講義及び著作等にて、世道民心を感化すること等、皆生産事業なり。⁷⁸⁾

このような「生産事業」の定義からするならば、実業家層の感化を通して新たな政治体制を構築する社会家の仕事は、生産事業のひとつに他ならない。そう考えてよいとするならば、社会家による実業家層の感化は決して「外部」からの働きかけではなく、産業社会の内在的な動きのひとつということになるだろう。こうした社会家の位置づけにはおそらく、T. カーライルの「英雄崇拜」に対する忌避意識と、実業家層自らの運動として実業的政党を位置付けようという意識が働いているのではないかと推測される。

カーライルは新渡戸に対して多大な影響を与えた人物であるが、久松はその「英雄崇拜」に対する否定的意見を著作のなかで繰り返し述べている。そもそも社会主義のような実行に強い権力を必要とする施策においては、その過程において「英雄崇拜」や内閣の権限増大、その反面として議会の形骸化を招き寄せる可能性を多分に含んでおり、フランスのボナパルティズム、ドイツの国家社会主義、さらには日本の帝国党⁷⁹⁾はその好典型であると久松は見ていた。それだけに、一握りの「英雄」によってではなく「衆思群力を集てこれ〔国家社会主義〕を実施するの見込みを立」てることが重要となるのだが⁸⁰⁾、制度的には当然に普通選挙の実施を求めつつ、問題はその普通選

挙にいかなる実質を盛り込むかが重要であるという久松の政党論が展開されることになる。たとえば久松は次のように述べている。

政府及び議員は、完全なる社会政策を立つべし。政党は新に社会的政紀を發表すべし。而して社会家は、先づ社会主義を闡明し、鼓吹するの機関として、国民団体を組織し、政党の別動隊と為りて、社会経済の大本たる生産機関統理法、及び社会的市府自治制等の主動政策を提唱し、邁住蹶起、大いに天下に呼号し、上は至尊陛下を翌載し奉り、下は衆庶を愛撫するの概あらんを要す⁸¹⁾

久松にとって社会主義は、当然、議會内外の世論の支持を条件として実現されるものであり、そのためには「社会家」を中心とした国民団体の組織、社会主義の教育活動が行われることが必要であると考えたのであった。久松が新しい社会秩序の担い手として期待する実業的政党は、たとえ議席数が少なかったとしても、世論の広範な支持を背景として議席数以上の存在感を発揮することが期待された⁸²⁾。

ただし久松は「社会家」と社会、あるいは社会主義者と実業家の間に優劣関係を認めていない。彼らは等しく「生産事業」に従事しており、「社会家」においても常にその理論の実践的価値が問われている。むしろ、「社会家」の啓蒙主体としての役割は上記のような位置づけと完全に整合的とはいえないのであるが、大学や公的組織を拠り所としない知識人を社会のなかでどのように位置づけることができるかという問題をめぐる思考の痕跡として、肯定的にも評価し得るだろう。

久松にとって「社会家」としての活動は、「生産」ないし「実業」という日常世界のなかから政治の目指すべき理想を抽出し、その理想を踏まえて大衆を動員していくものであるという点で、自由民権運動の延長に位置付けられていた。そのことは、実業的政党と、社会家によって組織される国民団体の関係を、「明治十六年頃の改進黨、嚶鳴社議政会」に例えていることから明らかだろう⁸³⁾。そしてまた、阿部宇之八宛書簡のなかで久松は「矢野尾

崎両氏」と「今一度協同して新主義を鼓吹し新運動を試み度、内決罷在候」と述べ⁸⁴⁾、どこまで信憑性があるのは不明であるが、改進黨の同志である矢野龍溪・尾崎行雄と協同で運動を行う可能性に言及している。こうした民権運動からの連続性の意味するものが何であるかについて、最後に改めて考えてみたい。

おわりに

久松義典における社会学・社会主義の特徴がいかなる点にあるかといえ、産業社会の主体たる実業家層の「道義」に、今日から見れば過大とも思える期待がかけられている点にあると言えるだろう。初期社会主義の一般的傾向とは異なり、産業社会を通して析出されてくるあらゆる類の社会問題を解消するため、久松はもっぱら実業家層が「道義」を身に着けることの重要性を指摘する。その「道義」の存在を豊富な実例を通して明らかにし、実業家層を啓蒙・組織化していくという役割を与えられたのが、社会学を身に着けた「社会家」であった。このとき社会学は、社会改良の実践的な道具であると同時に、それを学ぶ者の視野を拡大し、人格を陶冶し、「不平家」を「真の社会改革家」たらしめるものとして認識されていた。

社会学的な視点を身に着けた知的エリートによって政治体制が構築されるべきである、あるいはその構築に主導的な役割を果たすべきであるという信念は、民権運動家として活動していた時期からはほぼ一貫したものである。新渡戸を通して本格的に学習した社会学はそうした信念をより強化したわけだが、それだけに、久松の社会学理解の基盤が道学的・経験主義的であり、欧米の富豪や政治家が行った「実例」の枠から出ることのできない保守的な傾向をもったのは、ある意味当然のことであった。

理論家としての久松が現在ではほぼ忘れられた存在であるが、その門下生に対しては強い印象を与え、何人かの社会事業の実践者が輩出されたこと

は、こうした文脈から考察されるべきであろう。明治30年代の久松は、社会的にはほぼ忘れられた存在となりつつも、「社会から見捨てられたのではなく、社会を見捨てたのである」と自認する過剰なまでの誇り高さをもち⁸⁵⁾、それゆえに、政治家や実業家の倫理的退廃を非難し、権力を「道義」に基づいて行使することの必要性を訴えた。門下生に対する影響は、久松の社会学理論よりもむしろ、社会学と結びついた人格的な感化力に由来しているように思われる。

ところで、こうした社会学と「道義」の結びつきは、久松に固有のものというよりむしろ、同時代の社会学の輪郭を際立たせる特徴であった。例えば、久松もたびたび寄稿した雑誌『社会』において、社会学者・高木正義は以下のように述べている。

社会学の研究は此狭小なる心胆を開きて拡大にし、個人的を社会的にし、私欲的を公共的にし、秘密的を公同的に変化せしむべきを信ず。蓋し社会活動の理法を弁知し来れば、社会的たらざらんと欲するも得べからず、社会的觀念にして勃発せんか、大事業を企図するの精神を発揮し、慈善事業、貧民救助忽所として成るべし。今日口頭以て社会と云ひ国家と称するも、其規模狭小にして事業挙らざるを以て之を觀るに、社会の大勢は未だ私利私欲の個人的觀念に支配せらるるか為めならざるを得んや。⁸⁶⁾

こうした事例からも明らかなように、この時期までの社会学はひとつの学問体系であるとともに、「私利私欲の個人的觀念」を離れ「社会的」「公同的」な精神を養うという、一種の倫理的役割を与えられていた。ただし、社会学におけるこのような役割は、明治30年代の中頃から後半にかけて急速に失われていく。同様の役割を引き継いでいったのは、特定の学問というより、旧制高校を中心に展開された「教養主義」の全体であり、それに輪郭を与えたのは、皮肉にも、久松に社会学の体系的な学習機会を与えた新渡戸稲造であった。

ともあれ、久松の生涯と、そのなかでの社会学の位置づけは、なぜ社会学が明治初期の知的世界においてあれほど広範な支持を獲得したのかという疑問に対して一つの答えを与えてくれるように思われる。

注

- 1) 柳田泉「久松義典とその政治小説」1939年(『明治文学研究 第10巻 政治小説研究 下巻』〔春秋社、1968年〕)。
- 2) 阿由葉宗三郎「回顧 久松義典のことども」『北方時代』(1931年4月号)55～57頁。著者は明治25年ごろに久松と同じ北海道毎日新聞社に記者として在籍していた。
- 3) 柴田博陽「窮境の得意! 久松義典君」『栃木人物評論』(柴田博陽、1901年)34頁。著者は久松の学校にも頻繁に出入りしていた人物で、のちに久松が金沢に移住すると、それを追って自らも移住している。
- 4) 布川静淵「明治三十年前後の社会学会 社会運動に関する追憶談」『社会学雑誌』53号(1928年)、絲屋寿雄「狹堂久松義典について」『明治文化』10巻5号(1937年)、柳田泉「久松義典のこと」『明治文化』10巻6号(1937年)。
- 5) 柳田前掲「久松義典とその政治小説」。
- 6) 川合隆夫が90年代から2000年代初めに行った一連の社会学史研究・社会学関連雑誌の紹介はまさにこの問題を意識したものであったが、久松を始め当時活躍した多くの社会学者について、基本的な伝記も含めほとんど何もわかっていない状態が続いている。
- 7) 大日方純夫『自由民権運動と立憲改進黨』(早稲田大学出版部、1993年)3頁。
- 8) 大久保利夫編『衆議院議員候補者列伝 第1編』(六法館、1890年)による。以下、第1回総選挙出馬までの久松の経歴について、注記しない限りは同書に拠る。
- 9) 「本の籬」1886年(『桑名藩史料集成』〔桑名市教育委員会、1990年〕)。ただし蟄居を言い渡された正確な時期や理由については不明である。なお、義典の政治小説『代議政談 月雪花』(1887年)には義制(号・操軒)をモデルにしたと思いき「日高操軒」という老人が登場し、意見の不一致により官を退いた人物として描写されている。
- 10) 文久元年の桑名藩の分限帳に「新寄附御番 格無役 四百石 久松芳次郎」の名が見られる(「文久元年辛酉 御家中分限帳」前掲『桑名藩史料集成』)。
- 11) 岡崎官次郎編『北海道人物誌 第1編』(北海道人物史編纂所、1893年)144頁。前掲『衆議院候補者列伝 第1編』では久松が入学した学校を単に「官立学校」とのみ書いており、柳田泉はこれを東京英語学校と推測している(前掲「久松義典とその政治小説」)。しかし、これは久松が同時期に英書の翻訳を行っていることに引きずられたミスリードであろう。東京英語学校に久松が在籍していたことを裏付ける史料は見当たらない。

- 12) 栃木県師範学校『創立六十年』（栃木県師範学校、1935年）、森透「自由民権運動における自由教育論の考察——栃木県の事例を中心に——」『教育学研究』50巻3号（1983年）。
- 13) 久松義典『近世社会主義評論』（文学同志会、1901年）193頁。
- 14) 久松義典「第一期国会に於て政治家の本領」『新演説』3号（1889年）54・56頁。
- 15) 園田英弘・濱名篤・廣田照幸『士族の歴史社会学的研究』（名古屋大学出版会、1995年）24頁、参照。
- 16) 大久保前掲『衆議院議員候補者列伝 第1編』619頁。
- 17) 『栃木新聞』（1881年4月27日付）。栃木県史編さん委員会『栃木県史通史編6（近現代1）』（栃木県、1982年）140頁からの引用による。
- 18) George Leland 述・久松義典筆記『体育新書』（玉沾堂、1879年）緒言4頁。
- 19) 同上、8頁。
- 20) 久松義典『代議政談 月雪花』（集成社、1887年）例言1頁。
- 21) 『国民新聞』1890年2月24日付。ただし文学会の活動の実態については全く不明である。なお、尾崎行雄の執筆と推定される『朝野新聞』（1890年2月27日付）の社説「文学世界の近況」には政治小説の衰退に対する危惧が記されている。
- 22) 柳田前掲「久松義典とその政治小説」65頁。
- 23) 同上、68～69頁。
- 24) 1890年5月25日付、久松義典より大隈重信宛書簡（早稲田大学史料編集センター編『大隈重信関係文書9』（2013年））。
- 25) 『朝日新聞』（1890年12月6日付）。
- 26) 『読売新聞』（1891年1月27日付）。
- 27) 『読売新聞』（1890年12月5日付）、『朝日新聞』（1890年12月24日付）広告。
- 28) 『読売新聞』（1891年2月18日付）に、小林伝平が公民協会を脱会したことを告げる広告文を掲載している。その後、公民協会の活動は確認されていない。
- 29) 『読売新聞』（1891年5月28日付）。
- 30) 久松義典「惨状観察員報告 第四報」『郵便報知新聞』（1885年8月12日付）。
- 31) 1886年8月29日付、久松義典より徳富猪一郎宛書簡（徳富蘇峰記念館所蔵）。
- 32) 1889年2月17日付、久松義典より徳富猪一郎宛書簡（同上）。
- 33) 久松義典「主治者たる難し被治者たる亦易からず」『国民之友』18号（1888年）。
- 34) 同上、188・189頁。
- 35) 久松義典「何をか社会の顕象と謂ふか」『社会之顕象』1号（1888年）2頁。
- 36) 同上、3頁。
- 37) 同上、2頁。
- 38) 木村直恵「『社会学』と出会ったときに人々が出会っていたもの」『現代思想』42巻16号（2014年）、参照。

- 39) この問題について考える場合、久松の著作のなかでは『改訂増補 雄弁大家集』（巖々堂、1882年）が示唆的である。同書は「雄弁」（演説）の組み立て方だけでなく、演説中の身振り手振りから選挙中の内談会の開き方に至るまで指導するきわめて「実践的な」マニュアルである。しかしその目的は、いかに演説・集会を通して結束を強めるかという一点に集中しており、「雄弁」を政治制度や政治文化全体のなかに位置付け考察するという姿勢は乏しいと言わざるを得ない。この点は馬場辰猪『雄弁法』（朝野新聞社、1885年）と比べた場合に明らかであろう。「雄弁」という問題を通してヨーロッパ文化の歴史的深みを照射し、それによって「現在の」ヨーロッパを相対化する発想は、久松のみならず同時代の民権家のほとんどに欠けていた。
- 40) 徳富蘇峰『将来之日本』1886年（『現代日本文学大系』〔筑摩書房、1972年〕）166頁。
- 41) ブール・ヴァシール伯著、狷堂野史（久松義典）重訳「伯林社会」『国民之友』2巻19号（1888年）17頁。著者の「ブール・ヴァシール伯」がいかなる人物であるのかは不明である。
- 42) 北海道議会開設運動における久松の行動については、塩出浩之「明治立憲制の形成と「植民地」北海道」『史学雑誌』111巻3号（2002年）、永井秀夫編『北海道民権家史料集』（北海道大学出版会、1986年）、を参照。
- 43) 北海道共進会協賛会の法文を起草している（阿由葉前掲「久松義典のことども」）。
- 44) 久松義典「欧州教育小史」『史海』2号（1891年）。
- 45) 「高田屋の偉蹟と日露交通起源」を明治24年11月から25年4月まで連載し、それに続けて「徳川幕府蝦夷支配始末、北海道の経済問題」を26年1月まで連載している。
- 46) 久松義典「海国日本に於る海事思想」『太陽』1巻10号（1895）、52～53頁。
- 47) 同上、54頁。
- 48) 永井前掲『北海道民権家史料集』、を参照。
- 49) 『読売新聞』（1894年5月5日付）。日清開戦を見越してのことと推測される。
- 50) 阿由葉前掲「久松義典のことども」。
- 51) 『朝日新聞』（1897年3月19日付）、『読売新聞』（1897年3月19日付）。
- 52) 『朝日新聞』（1897年7月4日付）。
- 53) 柳田前掲「久松義典とその政治研究」、津田潔「久松義典『社会小説・東洋社会党』覚書」『部落問題と文芸』1号（1988年）
- 54) 久松義典「兆民居士を憶ふ」『社会学雑誌』第4巻1号・2号（1902年）。
- 55) 久松義典「社会的管見一斑」『日本人』（第3次）109号（1900年）188頁。
- 56) 北岡伸一「新渡戸稲造における帝国主義と国際主義」『岩波講座 近代日本と植民地4』（岩波書店、1993年）184頁。
- 57) 田中愼一「植民学の成立」『北大百年史 通説』（北海道大学、1982年）600～601頁。
- 58) 栃木市史編さん委員会編『栃木市史 史料編・近現代Ⅱ』（栃木市、1983年）940頁。
- なお、栃木町には久松の義兄（妻・スガの姉の夫）である片岡如松が写真館を開いて

- いた（小平豊『文明開化の写真師 片岡如松物語』〔随想舎、2005年〕）。栃木町への移住はおそらく、この辺りの事情も関係していると思われる。
- 59) 平岩幸吉の事績については、小川澄江「平岩幸吉と栃木婦人協会の活動」『栃木史学』25号（2011年）、を参照。
- 60) 前掲『栃木市史 史料編・近現代Ⅱ』941頁。
- 61) 久松義典「社会改革家の言論と事業」『東京経済雑誌』1142号（1902年）19頁。
- 62) 同上、20頁。
- 63) 住家正芳「内村鑑三はベンジャミン・キッドをどう読んだか」『立命館産業社会論集』48巻4号（2013年）、太田英昭『日本社会民主主義の形成』（日本評論社、2013年）第3章、参照。
- 64) A.W.Small and G.E.Vincent, *An Introduction to the Study of Society*. (New York: American Book Company, 1984). なお、片山潜が論文「社会学の綱領」（1896年）を執筆する際に参考にしたのも同書であり、久松もこれに目を通していた可能性がある。前掲『日本社会民主主義の形成』第3章、参照。
- 65) 久松義典『社会学問答』（文学同志会、1903年）93頁。「紀述的」「統計的」「動態的」はスモールとヴィンセントの共著における Descriptive, Statical, Dynamic にそれぞれ対応すると思われる（この場合 Statical は静態的と訳す方が適切であるのだが、すぐ後で述べているように久松の議論が豊富な実例によって説得力を高めるという論法を取っていることを考慮すると、意図的な選択であったのかもしれない）。
- 66) 久松前掲『社会学問答』61頁。
- 67) 同上、141頁。
- 68) 久松前掲『近世社会主義評論』173頁。
- 69) 久松義典「日本社会問題と実業の政党」『東京経済雑誌』1006号（1899年）1152頁。
- 70) 『国民之友』（1893年7月号）。
- 71) 久松義典『最近国家社会主義』（文学同志会、1901年）14～16頁。
- 72) 久松前掲『近世社会主義評論』205頁。
- 73) 久松義典『富国読本』上巻（大日本図書、1903年）9頁。
- 74) もっとも実際には、日露間の緊張というカントリー・リスクの大きさから、外国資本家による投資は活発ではなかった。石井寛治『日本の産業革命』（朝日新聞社、1997年）128～130頁、参照。
- 75) 久松前掲『近世社会主義評論』83頁。
- 76) 久松義典『社会学講義』（文学同志会、1902年）152頁。
- 77) 同上、118頁。
- 78) 久松義典『富国読本』中巻（大日本図書、1903年）138～139頁。
- 79) 帝国党はその綱領に社会政策の拡充を掲げていた。
- 80) 久松前掲『最近国家社会主義』45頁。

- 81) 久松前掲『近世社会主義評論』序文3～4頁。
- 82) 久松義典『社会小説 東洋社会党』（文学同志会、1901年）は実業的政党の設立をシミュレーションしたものであるが、おそらくは明治33年ごろの近衛篤磨を焦点とする非政友合同の動きを意識して、実業的政党＝東洋社会党が連立内閣と交渉することで政策の実現を図るという筋書きになっている。
- 83) 久松前掲『近世社会主義評論』88頁。
- 84) 1903年6月23日付、久松義典より阿部宇之八宛書簡（北海道立図書館所蔵）。
- 85) 柴田前掲「窮境の得意！久松義典君」。
- 86) 高木正義「社会学研究の必要」『社会』1号（1899年）35～36頁。